

立間祥介訳

三 国 志

平凡社

立間祥介訳

二国志

四

訳者紹介

立間祥介 1928年東京生。善隣外事専門学校卒。
専攻 中国文学。慶応義塾大学教授。主訳書『従文自
伝』（河出書房）『中国講談選』『呼蘭河の物語』『児
女英雄伝』『今古奇観』（共訳）（平凡社）『駱駝祥子』
（岩波書店）

三国志 コンパクト版 第四巻

発行日 一九八九年 一月二〇日 初版第一刷

定価 一〇〇〇円

訳者 立間祥介（たつま・しょうすけ）

発行者 下中 弘

発行所 株式会社 平凡社

〒一〇二 東京都千代田区三番町五

電話・東京（〇三）二六一―一七六五（編集）

（〇三）二六五―〇四五五（営業）

振替・東京八一二九六三九

印刷 東洋印刷株式会社

製本 和田製本工業株式会社

落丁・乱丁本は小社サービス係でお取替いたします（送料小社負担）

ISBN4-582-32514-9

三国志主要人名表 配列は国別の五十音順。

〔魏〕

鍾会（三三—三六）字は士季。智謀にたけ、鄧艾の好敵手。鄧艾とあらそつて蜀にはいり、鄧艾を追つて蜀を握るや謀反を企んで殺される。

徐晃（？—三七）字は公明。強力無双。はじめ楊奉に仕え、曹操の部将となつて偃城で関羽を大破する。

曹奂（二四—三〇）字は景昭（「演義」では景召）。魏の元帝。曹操の孫。晋の武帝司馬炎に皇統を譲り、陳留王に封じられる。

曹植（二一—三三）字は子建。曹操の第三子。詩人として有名。晩年、陳国に封じられ、思と諡されたので陳思王と呼ばれる。

曹真（？—三三）字は子丹。曹操の甥。武将として曹操・丕・叡の三代に仕えた元老。大司馬として蜀平定を計画したが、陳倉道出陣で失敗し病を得て死ぬ。

曹操（一五—二〇）字は孟徳。幼名阿瞞。権謀術数に

たけた英雄で、文学にも深い理解をもつ。後漢献帝を擁して中原を統一し魏王となる。

曹爽（？—三六）字は昭伯。曹真的長子。曹叡に仕えて軍政の大権を握るが、司馬懿と対立し斬られる。

曹丕（二七—三三）字は子桓。魏の文帝。曹操の長子。文武両道にたけ、特に弟の曹植と並んで建安文学の代表的存在として名高い。献帝を廃して魏を建てる。

曹髦（二二—二六）字は彦士。曹丕の孫。高貴郷公より司馬師に迎えられて帝位につく。のち司馬昭の専横を怒り、みずから昭を討とうとして殺される。

張郃（？—三三）字は儁乂。韓馥・袁紹に仕えたのち、官渡で曹操の配下となる。智謀にたけた武将で、街亭で馬謖を破る。

張遼（二六—三三）字は文遠。もと呂布に仕えた曹操の部将。情義に厚く、合淝の役で、歩卒八百をもつて十万の呉軍を破り江東に勇名をとどろかす。

鄧艾（？—三四）字は士載。智略抜群の武将。奇兵をもつて成都を衝き劉禪を降伏させたが、鍾会に讒

言されて斬られる。

〔蜀〕

関羽（？―三〇）字は雲長。蜀の五虎将の一。劉備

の義弟で文武両全の名将。劉備の入蜀後、荊州を固めていたが、呉と事をかまえて麦城で敗死する。のちかずかずの靈驗をあらわす。

姜維（三〇―三六）字は伯約。はじめ魏に仕え、天水

で諸葛亮に降る。諸葛亮に兵法を譲られ、亮の死後、蜀の軍師として活躍する。

黄忠（二六―三三）字は漢升。蜀の五虎将の一。弓の

名手。老いてなお定軍山で魏の夏侯淵を斬り勇名をあげる。

諸葛瑾（三七―三三）字は思遠。諸葛亮の子。鄧艾を綿

竹に迎撃して戦死する。

諸葛亮（二六―三三）字は孔明。別名臥竜。劉備なきの

ち、蜀の運命を双肩に荷って粉骨碎身、五丈原で陣没する不世出の大軍師。

趙雲（？―三六）字は子竜。蜀の五虎将の一。槍の

名手で沈着勇敢。劉・関・張なきのちも諸葛亮を助

けて活躍する。

張飛（？―三三）字は翼徳。蜀の五虎将の一。劉

備・関羽の義弟。三国屈指の豪傑だが、生来の短気がわざわいして部下に寝首をかかれる。

馬超（二六―三三）字は孟起。蜀の五虎将の一。葭萌

関で曹操を危地に追いつめた勇将。

龐統（二六―三三）字は士元。別名鳳雛。諸葛亮と並

び称される知恵者。軍師として劉備の入蜀に随行し、落鳳坡で戦死する。

劉禪（三七―三七）字は公嗣。幼名阿斗。劉備の長子。

劉備が蜀の先主と呼ばれるのに対し、後主と呼ばれる。魏に降伏したのち安樂公に封じられる。

劉備（二六―三三）字は玄德。蜀の昭烈帝。曹丕が魏

を建てるや、成都で蜀を建てるが、呉平定を志して陸遜に大敗し、白帝城で死ぬ。

〔吳〕

甘寧（？―三三）字は興霸。長江の盜賊出身の孫權

の部将。濡須の合戦で、わずかに百騎をひきいて曹操の本陣に突入し、威名をあげる。

孫休（三三—三六）字は子烈。孫權の第六子。瑯琊王

から孫綝に迎えられて帝位につき、綝を殺して皇室の威信を回復する。

孫權（二二—二五）字は仲謀。呉の大帝。父兄（孫

堅・孫策）の業をついで江東に人材を集め、魏・蜀につづいて呉を建てる。

孫皓（二三—二六）字は元宗。孫權の孫。凶暴で酒色

を好み、無道の所行多く亡国を招く。晋に降つて帰命侯に封じられる。

孫綝（三一—三五）字は子通。孫靜（孫權の叔父）の

曾孫。孫亮・孫休を迎立して専横をきわめ、孫休に殺される。

孫亮（二四—二六）字は子明。孫權の末子。十歳で帝

位についたが、十六歳のとき孫綝に廃されて会稽王に降される。

丁奉（？）字は承淵。孫權・亮・休・皓の四帝に仕

えた名将。孫皓擁立の功勞者。
陸遜（二二—二五）字は伯言。猊亭で劉備を大破した

智將。のち丞相となるが、孫權が末子亮を太子に立てようとしたのを諫め、いれられずに憤死する。

呂蒙（二六—二九）字は子明。孫權に仕えた文武両全

の名将。関羽を破つて大功を立てるが急病で死ぬ。

〔晋〕

司馬懿（二七—三五）字は仲達。權謀術数にたけ、諸葛

亮の好敵手としてしばしば亮と対峙し、ついにその中原進出の企図を挫折させる。齊王曹芳のとき曹爽

を殺して丞相となり、魏の大權をにぎる。
司馬懿（三六—四〇）字は安世。晋の武帝。司馬昭の長

子。魏の元帝曹奂を廃して晋を建て、呉を亡ぼして天下を統一する。

司馬師（三八—四二）字は子元。司馬懿の長子。兵書に

通曉し、司馬懿なきのち魏の政權を握り、曹芳を廃するなど専横をきわめる。

司馬昭（四二—四六）字は子尚。司馬懿の次子。兵法に

たけ、兄の師のあとをついで魏の大將軍・晋公となり、蜀平定ののち晋王に封じられる。

杜預（四三—四六）字は元凱。博學多才、兵法にたけ、

鎮南大將軍として呉の平定にあたる。『春秋左氏經伝集解』ほかの著書がある。

羊^{よし} 結^{むす} (三二七) 字は叔子^{しゆくし}。寛容^{くわんよう}で小事にこだわら

ず、曹操^{さうそう}のとき、荊州^{けいしゅう}の都督^{ととく}となつて人心をつかむ。
晋^{しん}に仕えて征南大將軍^{せいなんだいしやうぐん}となる。

目次

第五十二回

諸葛亮 智をもつて魯肅を辞け
趙子竜 計をもつて桂陽を取る

3

第五十三回

関雲長 義によりて黄漢升を釈し
孫仲謀 大いに張文遠と戦う

22

第五十四回

呉国太 仏寺に新郎を看
劉皇叔 洞房に佳偶を続ぐ

41

第五十五回

玄德 智もて孫夫人を激せしめ
孔明 二たび周公瑾を気らしむ

63

第五十六回

曹操 大いに銅雀台に宴し
孔明 三たび周公瑾を気らしむ

80

第五十七回

柴桑口に 臥竜 衷を弔ひ
未陽県に 鳳雛 事を理む

100

第五十八回

馬孟起 兵を興して恨みを雪がんとし
曹阿瞞 髪を割ち袍を棄つ

124

第五十九回

許褚 衣を裸いで馬超と闘い
曹操 書を抹して韓遂を問つ

145

第六十回

張永年 反つて楊修を難じ
龐士元 議つて西蜀を取らんとす

166

第六十一回

趙雲 江を截つて阿斗を奪い
孫權 書を遺して老瞞を退く

196

第六十二回

涪関を取りて 楊・高 首を授し
雒城を攻めて 黄・魏 功を争う

217

第六十三回

諸葛亮 痛んで龐統のために哭き
張翼徳 義をもつて嚴顔を釈す

239

第六十四回

孔明 計を定めて張任を捉え
楊阜 兵を借りて馬超を破る

261

第六十五回

馬超 大いに葭萌関に戦い
劉備 自ら益州の牧を領す

281

第六十六回

関雲長 刀ひとつにて会に赴き
伏皇后 国の為に生を捐てる

306

第六十七回

曹操 漢中の地を平定し
張遼 威を逍遙津に震う

330

第六十八回

甘寧 百騎にて魏の營を劫い
左慈 盃を擲げて曹操を戯る

351

主要人名表

前付

地図

371

三国年代対照表

373

三^{さん}

国^{こく}

志^し

四

立^{たち} 羅^ら

間^ま 貫^{かん}

祥^{しょう}

介^{すけ} 中^{ちゅう}

訳 作

第五十二回

諸葛亮しよかつりやう 智ちをもつて魯肅ろしゆくを辞しりぞけ
趙子竜ちやうしりやう 計けいをもつて桂陽けいようを取る

さて周瑜しゆゆうは孔明こうめいに目の前で南郡なんくんを奪われ、また彼が荊州・襄陽けいしやうをも取つたと聞いては、腹を立てずにはいられない。かつとなつた拍子に矢傷が破れて氣を失い、半時あまりしてようやく生きかへつた。大将たちは落ち着かせようと、口々になだめたが、いっかな聞きいれず、

「あの土百姓めの息の根をとめいでは、どうにも心がはれぬ。是が非でも南郡を攻め落として、東呉に奪い返してみせる。程仲謀ていちゆうぼう殿、力をお貸し下されい」

と言つているところへ、魯肅が来たので、

「わしはこれより出陣して劉備・諸葛亮と雌雄を決し、城を奪い返す所存、力添えを頼む」

と言ふと、魯肅が言つた。

「それはなりません。いまは、曹操との戦いの最中にて勝敗のほども分ならず、しかもわが君がまだ合淝がひを落とせずにおられる時でござる。この際、同士討ちを始めて、曹操の軍勢に虚を衝かれてもしたら、一大事ではござらぬか。その上、劉玄德は曹操と旧交ある者、わが方に攻め立

てられて城を曹操に明け渡し、力を合わせて攻めて来るようなことになれば、とうてい支えきれ
るものではありませんまい」

「ではあるが、われらが心をくだき、人馬を失い、多くの金銀・兵糧をついやしてきたものを、
まんまと攫さらわれたとあつては、黙つてもおれぬではないか」

「ここはしばらく胸に収めておいて下されい。それがしが玄德に對面いたし、道理をもつて話し
てみましょう。それでも、向うで聞きいれぬとあらば、力ずくで押すことにされたらよいではご
ざらぬか」

大将たちも、

「子敬殿の言われることはまことにごもつとも」

と云うので、魯肅は從者を随えて南郡へ向かい、城壁の前まで来て開門を申し入れた。すると
趙雲ちょううんが出て来て、用向を尋ねたので、

「劉玄德殿にお会いしてお話しいたしたいことがござつて参つた」

「わが君は、軍師殿とともに荊州城においてござる」

そこで魯肅は南郡を離れ、荊州に急行したが、整然と立ち並んだ旗さし物や、堂々たる軍容を
見て、ひそかに「孔明は実に神のような人だ」と、舌を巻いたものであつた。一方、孔明は、魯
子敬が對面を申し入れて来たとの知らせを受け、城門を開かせて役所に請じ入れた。挨拶が済ん
で主客それぞれ席につき、茶が出されると、魯肅はやおら口をきつた。

「それがし、このたびは主呉侯、都督公瑾の旨を受け、皇叔に一言申し述べたことあつて参上つかまつた。そもそも、先に曹操が百万の大軍をひきい、江南を討つと称して攻め下つたのは、実は皇叔を滅ぼさんとの心からでござつた。それを追い退けて皇叔の危急をお救いいたしたのは、わが東呉でござる。さすれば、曹操の領しておつた荊州の九郡は、当然わが東呉のもの。しかるに皇叔が術策を弄してこの地を横取りし、莫大な犠牲を払つた東呉をよそに、利益をひとり占めにするとは、余りに無道な仕儀ではござらぬか」

「これは子敬殿のお言葉とも思えませぬな。『物は必ず主に帰す』と言うではござらぬか。荊州の九郡はもともと東呉の領地ではなく、劉景升殿が治めてこられたもので、わが君は景升殿のご舎弟であらせられる。景升殿は亡くなられたとは申せ、ご子息がおられるのじやから、叔父として甥御を扶けてこの地を治められることに、何の不思議もないと存ずるがな」

「もし劉琦殿がここを領せられるとなら、当方とて特に異存はござらぬが、いま公子は江夏におられ、ここにはおいでではないはず」

「では、公子がおいでならよいと言われるのじやな」

と言うと、孔明は左右の者に命じた。

「公子をこれへ」

すると、二人の近習が衝突のうしろから劉琦を抱えるようにして現われた。

「病中のためご挨拶にも出ず、ご無礼つかまつりました」

と劉琦に言われて、魯肅はあつけにとられ、しばし言葉もなかったが、ややあつて孔明に向かい、

「もし公子がお亡くなりになった時は、どうなさる」

「公子がおいででの限り、ここを手放すことはござらぬが、お亡くなりになるようなことがあれば、話は別じゃ」

「さらば、公子がお亡くなりになった節は、きつと東呉へお返し下さるでござろうな」

「さすがは子敬殿じゃ。しかと承知いたした」

話が決まってから酒宴となったが、宴果てると、魯肅は別れを告げて城を出、その夜のうちに陣にもどつて、この由をつぶさに報告した。すると周瑜は、

「劉琦はまだ子供ではないか。そうそう死ぬはずはない。そんなことでは、いつ荊州が取りもどせるか知れたものではない」

「その懸念はご無用にござる。それがし、必ずや荊襄を東呉に取り返して進ぜる」

「と申されるからは、何ぞよい策をお持ちでござるか」

「それがしの見たところ、劉琦は酒色を過こぎして、すでに病膏肓こうかうにはいつており、もはや頼もなくて、息をするのも苦しげな様子、このあと半年とはもちますまい。それを待つて荊州を引き取りに参れば、劉備とて二度と逃口上はうてませぬ」

周瑜がなお怒気おさまらずにいたとき、にわかに孫權からの使者が到着した。呼び入れると、

「殿には合淝がっぴにおいて敵に囲まれ、苦戦をつづけておられますゆえ、都督殿に軍勢をもどして、ただちに合淝へ加勢を出されたいとのことにござります」

との口上である。やむなく周瑜は陣を引き払って柴桑さいそうにもどり、己は養生しなければならぬので、程普ていふに命じて兵船・軍勢を揃え、合淝の孫権のもとへ向かわせた。

さて劉玄德は、荊州・南郡・襄陽を手中に収めていたく満足し、「孔明と」先々の計はかりごとを練つていたが、そこへ進み出て進言しようとした者がある。見れば伊籍いせきなので、玄德は昔日の恩義を思い、うやうやしく座をすすめて意見を尋ねた。すると伊籍の言うのに、

「荊州を安泰に置こうとなされるなら、賢人を召しいだしてお尋ねになるが宜しゅうござりますよう」

「その賢人とは、どこにおられる」

「されば、当地の馬家ばの五人兄弟は、いずれも才名を謳うたわれておりますが、一番下は名を護しよく字ようじようを幼常と申します。この五人のうち、もつとも秀でたるは、眉毛に白い毛が混じっておる、名を良りよう、字を季常きじようと申す者にして、土地でも、『馬氏の五常、白眉最も良し』と言いはやされておる者。この人を召しいだされて、お諮りになるが宜しゅうござりましょう」

玄德はただちにその人を迎えにやった。馬良が来ると、玄德は丁寧にもてなして、荊州を保全する方策を尋ねた。すると、

「この荊州は四面敵に囲まれた所ゆえ、長く保つことはなかなか難事にござる。よつて公子劉琦殿に当地にてご養生を願ひ、旧臣たちを集めて守りを固めさせることとした上、都へ上奏文を奉つて公子を荊州の刺史とされれば、民心も収まることにござりましょう。しかるのち、南方の武陵・長沙・桂陽・零陵の四郡を攻め取り、金銀・兵糧を貯えて基礎を固めること、これが長久の計でござろうか」

と言うので、大いに喜んだ玄德が、

「その四つの郡はどこから先に手をつけたら宜しゅうござるかな」

と尋ねると、

「湘江の西の零陵が最も近うござればこれをまず取り、次に武陵を取ってから湘江の東にある桂陽を取り、最後に長沙を取られるが宜しゅうござりましょう」

玄德は馬良を召し抱えて従事とし、伊籍をその副官とした。

かくて玄德は孔明と協議して劉琦を襄陽へ移して、雲長を荊州に呼びもどした上、ただちに軍勢を揃えて零陵攻略に打ち立つこととしたが、張飛は先手、趙雲は後詰、孔明・玄德は中軍となつて、総勢一万五千とし、雲長は荊州の留守、糜竺・劉封は江陵の留守と、それぞれ手筈をととのえた。

ここに零陵の太守劉度は、玄德の軍勢迫ると聞いて、息子劉賢と協議したが、劉賢が、

「父上、案ずることはござりませぬ。敵に、張飛・趙雲とやら申す剛の者がおりましよう、わ